

18世紀ドイツ文化

倉田 稔

ハプスブルク帝国では、マリア・テレジアが1740年に即位した。プロイセンでは、Hohenzollern家が興隆した。フリードリヒ・ウイヘルム1世が軍国主義国家を作り、官僚と軍隊の国にし、その後、フリードリヒ大王が即位した(1740年)。オーストリア、プロイセン、フランスの長い戦争が始まり、事実上2つの強国がドイツ圏にあることになった。プロイセンは民主主義精神を抑えた。フリードリヒ大王は、ドイツ国民文学に理解をもたないし、カントも読まなかった。フランス革命は一部インテリ以外にはドイツに影響を与えなかった。18世紀終りは、カント、経験論のヒュームが登場した。ヒュームに対してカントの先験哲学が作られた。カントの哲学革命であって、神の存在証明不可能を論じた。感性・悟性・理性の関係を述べた。1781年に、カント『純粹理性批判』が出た。

フランス革命(1789年)とその反動が生じた。1790年のヨーゼフ2世の死とともに、反フランス革命がはじまった。レオポルト2世の短期治世の後、フランツ皇帝からメッテルニヒ追放までの70年間の反動期があった。特にウィーンでは1792年のマリー・アントアネットの処刑が刺激となった。

レッシング (G. E. Lessing, 1729-81)

レッシングは、天分に恵まれた少年だった。1756年に、Hutcheson, *System of Moral Philosophy* を『理性に基づく道徳論』として翻訳した。古いものにとらわれない道徳感を持ち、デイドロの演劇論をドイツ訳した。ドイツ近代劇理論に寄与し、同時に身につけた。彼は一定の職もなく、旧式神学との論争、闘い、闘争のための全生涯であった。舞台や図書館で働いた。

全生涯はほとんど独身であった。愛する人が友人の妻であった。これはJ・S・ミルとハリエット・テイラーの例に似ている。友人の死後、1776年10月、そのEva Knoeigと結婚した。だがすぐ彼女は、1778年1月10日に亡くなった。その時の弟にあてた手紙は涙なくしては読めない。1月13日エッセンブルグあて手紙ではこうである。「私が、残りの生涯の半分を犠牲にして、他の半分のこの妻とともに暮らす幸福を購いえたとしたら、私はどんなに喜んでそうしたでしょう！ だがそうはいかなかったのです。そして私は、またしても自分の道を一人できまよい始めねばならないのです。……」

1776年にハンブルグに移り、H. S. Raimarusの子女と知り合い、娘のエリーザを通じて、彼の著述 *Apologie oder Schutzschrift fuer die vernuenftigen Verehrer Gottes* を見た。レッシングは、彼の死(1768年)後、1774-8年にいたって、その著述中より数個の *Fragments* を *Wolfenbüttler Fragmente* と題して公にした。

そのため、後、Melchior Goezeと神学にかんする論争がおきた。作品は、“Anti-Goeze”である。正統派教会は官憲の力を利用した。レッシングは、劇場に活動の場を見出した。『アンチ・ゲーツエ』は、「宗教問題を本質的な課題として含んでいる、ドイツ哲学の基礎への、カントと並んだ最初の寄与であった。」(1)「ゲーツエ反駁文は、雄弁の破壊的力、不意を突く巧妙さ、輝かし

い表現等の点ばかりでなく、天才性、哲学・詩的精神および道徳的崇高さの点でさえも、彼の全作品中第1位のものである。」(2)

1778年8月9日 Elise Raimarus あて手紙はこうである。「私は、ここに全く孤独に取り残されています。心から信頼できるような友だちはただの一人もいません。……どんなにか度々、私は、一度は人並に幸福になろうと望んだことでしょう……けれども、私は、自分が不幸だと考えるにはあまりに誇りが高いのです——歯ざしりして——それから小舟を風と波の欲するがままに流させるのです。自分からこの船を覆えそうとしないだけが見つけないのです！……」

ディルタイ (Wilhelm Dilthey) は言う。「ヴァニーやガリレイの悲劇ではないが、純粋に市民的なドイツ的な悲劇である。」

1778年8月10日、弟 Karl Lessing あて手紙で書く。「私の事件がどういう結末をとるかは、いまだにわからない。しかしどんなことも覚悟しているつもりだ。お前の知っているとおりに、必要なだけの金を持っているにこしたことはない。そこで昨夜私は、馬鹿げたことを思い付いた。私は、数年前に一つの劇の草案を立てたことがあって、その内容が当時私の夢想だにしなかった現在の論争と一種の類似を持っている。これを……予約で出版させようと思うのだ。」

これが『賢者ナータン』の成立である。予約者は千人以上で、その中にヘルダーの名があったことは、彼をことに喜ばせた。

1778年8月10日 Karl Lessing あてで、Giovanni Boccaccio の Il Decameron の第1日第3話、ユダヤ人 Melchisedech の物語、3つの指輪の話が、新作の中心になるだろうと、明言した。(3)

François Claude Marin, “Histoire de Saladin Sulthan d’Egypte et de Syrie” (エジプトおよびシリアの皇帝サラディンの物語) 1758年、によるレッシングへの影響がある。これはイタリアの哲学者 Cardanus (1501-1576) に遡る。かれは、その著 “De Subtilitate Rerum” で、4つの世界宗教を人物に表し、……無神論者と非難された。ナータンの草稿ができたのは、1776年のころらしい。

「啓蒙期の最も重要な人物はレッシングである。」(4) 「人間の価値をきめるのは、真理を所有することではなく、真理に達しようとする誠実な労苦である。」

レッシングは、生涯を通じて休むことのない真理追求者、不幸に耐えて生き抜いた男らしい人物、ドイツ近代文学の創始者である。無神論者ではない。のちの近代社会主義運動に刺激を与えた。

Lessing 評価は、Gervinus が、1830s に、レッシングは革命的天才、と。Treitschke は、1860s に、節度のある改良家、と。Schmidt, E. は、1890s に、改良家リベラリスト、とした。

Mehring の評価はこうである。レッシングの性格は、誠実と剛健さ、あきらむことのない知識欲、真理そのものよりも真理を探そうという努力を喜ぶ、問題のそのもっとも秘密の部分をつく、世俗的な財産を軽蔑、全ての圧制者に対して憎悪、被圧迫者に愛情、不正に対して絶えず戦闘準備、みじめな政治との戦いで、気品を失っていない。これらが我々を高め、元気づけてくれる。ドイツ労働者のお手本だ。

Nathan der Weise, 1779 『賢者ナータン』

第1幕

第1場

ナータン 「……われわれ人間というものは何という脆いものだ！」 p. 15

〃 「……人間にはやはり天使様よりも人間の方が親しみがあっていいものだからね。……」 p. 19

第2場

ナータン 「敬けんな狂信は善行を実践するよりははるかにたやすい。臆病な人間は、——自分ではそんな下心をはっきりと意識しないことが多いが、——ただ善行を実践する義務から免れたいばかりに、敬けんな狂信にひたることを喜ぶものだ。」 p. 28

第3場

回教僧 「口先だけでは何にもなりません。……」 p. 31

〃 「馬鹿な話です！ 愚かな自惚れじゃありませんか、何十万とい人間を虐げ、ちゅうきゅうし、略奪し、苛責し、くくっておきながら、少数の人々だけに慈善者顔をしたがるなんか！」 p. 34

第5場

神殿騎士 「いろいろ考えて見ることもせずに、ただ服従ばかりしているのですか。」 修道僧に向かって p. 38

第6場

〃 「多分あの人種には、金持ちということと、賢明ということは一つことなのだろう。」 p. 46

第2幕

第1場

ジッター 「あの人たちの誇りは、自分がキリスト教徒だということにあるのです。人間だということ誇るのではございません。」 p. 53

第5場

ナータン 「キリスト教徒やユダヤ教徒は、人間である前に、先ずキリスト教徒であり、ユダヤ教徒であるのでしょうか。ああ！ 人間というだけで満足しているもう1人を、あなたに見出すことができたならば！」 p. 74

〃 「どこの国でも優れた人間は広い地域を必要とします。あまりせせこましく植え付けられると、沢山のやつが枝を傷つけあつたりします。」 p. 73

第9場

アル・ハーフィ 「……高利で貸し付けるのが盗賊を働くのとあんまりかわりがない……」 p. 83

〃 「熟考する人は、何か実行せずに済ませるような理由を探すのです。即座に、自分の意志に従って生活するという決断のつかぬ人は、永久に他人の奴隷として暮らすでしょう。」 p. 83

第3幕第4場

サラディン 「……卑しいものの中でも一番卑しいもの」 金銭。

ジッター 「どんな卑しいものでも余り軽蔑してかかると復讐しますよ。」 p. 95

第4幕第1場

修道僧 「多くのことを知っている人は、また沢山の懸念を持っているものです……」
p. 124-5
(これより新版)

神殿騎士 「それは、聖職者というものが、たとえ過ちを犯してもその結果にたいして責任をとらなくてもよいという特権を持っているからですよ。」
「だからたとえ自分ではいくら1党1派に偏しない積もりでいても、知らず知らず自分の信奉する宗教の味方をするものです。」 p. 135

第5幕第4場

修 士 「しかし人というものは、本来の自分と世間の義理でよんどころなく動いている自分とが必ずしも一致するとはかぎりませんからな。」 p. 179

第6場

レ ー ハ 「父は冷たい本学問をてんで好まないのございます。そういうものは生命のない記号を脳に押すだけだと申します。」 p. 191

最終場

サラディン 「誰でも自分の善行を誇ったら、それでその善行は帳消しになるのだぞ。」 p. 202
ナータン 「猜疑が不信から生ずることは、申すまでもありません。」 p. 204

『賢人ナータン』は、「イフィゲーニエと同様に、人言天性のしんしな探求者が、眼を潤すことなくしては読みえない不滅の詩の作品」だ、Dilthey。

メンデルスゾーン、グラウム、フリートリヒ・ヤコビ、フォス、ゲーテが賛辞する。

『エミリア・ガロッチィ』 Emilia Galotti. Ein Trauerspiel in 5 Aufzuegen. 1772

Emilia Gallotti のスペリング、— a i で終り l をとる —、から分かるように、ドイツで起きたことをヒントに、イタリアで起こったものとして書く。これはベートーベンの「フィデリオ」と同じである。

登場人物

Emilia Galotti

Oduard // (エミリアの父) 大佐

Claudia // (// 母)

Hettore Gonzaga, Guastalla の殿

Marinelli

Camillo Rota

Conti 画家

引用は Lessings Werke in 5 Bänden. 1 Bd. Berlin und Weimar 1965

コンティ 「閣下、芸術はパンの方向へ向かって進んでいきます。」 S. 230

// 「労働ですか？ 労働はもちろん快とするところです。ただ余り沢山労働しなくちゃならないとなると、芸術家という名が少し危うくなってしまいます。」 第1幕

殿は、オルジナ伯爵夫人からエミリアに恋を移す。アピアニ伯は、エミリアと結婚することになる。マリネリは一計を案ずる。殿は、エミリアが教会に来るのを知って、祈りの際、口説く。

オドアルト・ガロッチェの性格・人物

父 Oduard は、「すべての男性の Tugend の模範」(S. 254) と、アピアニ伯。

公爵 「粗剛な古武士気質な奴でな。その他の点ではおとなしいいい奴なのだが。」1幕
クラウディア 「何という人だろう！ — 頑固な道徳一点張りも考えものだ！」1幕

アッピーニ 「男徳の典型です。」2幕

マリネリが、ガロッチェ家に来て、アピアニ伯を訪ねる。殿の政略結婚のための、全権使節にたのむ。それを拒む。

マリネリ 「大きかろうと、小さかろうと、主人は主人だ」(S. 259)

マリネリの部下、雇った悪党が、アピアニ伯を襲う。母とエミリアは、伯の馬車に乗っている。彼らは助けるふりをして、エミリアを宮殿につれてくる。

母はエミリアを探しにくる。アピアニ伯の死が判明する。死の間際、伯はうらんで、マリネリの名をいう。母は、策略を知る。

母 「自分自らの手で人殺しをするのに十分な勇気がないのだ。」S. 273

オドゥアルト、宮殿にくる。

オルシーナ 「あることにあたって、理性 [Verstand 悟性] を失わない者は、はじめから理性の持ち合わせがないのです。」S. 288 第4幕 (ある種の事実に面して理性を失わないでいられるような人間は、それを失おうにも第一、理性の持ち合わせがない人間です。)

オルシーナ、宮殿へきて、殿に拒否された、ところへ、父オドゥアルドが来て、かれにすべてを話す。

(剣を貸す) オドゥアルド、妻とオルシーナを返す。

マリネリ 「前へ！ 勝利者とは、かたわらに敵が倒れようと、味方が倒れようと、前進するものです。」

マリネリが来て、娘は町においておくように、と。

オド 「考えろ！ 考えろ！ というけれど、考えることは何もないと思う。」S. 294

「法律を尊敬しない者は、法律を持たない者と同じくらい、強い。」S. 295

娘の方でも心があつたとし、尋問のために、エミリアを宰相の家で監禁することになる。

父娘、会う。

エミリア 「……お目にかかりましょう — 人間として人間を玩具扱いにできる人があつたら」

オドゥアルド 「そして裁判官としての貴方にお目にかかります — それからその次はあの世で — 我々すべてを裁く人の前でお目にかかります。」

エミリア 「何も失わないか、すべてを失うかです」S. 301

「暴力！ 暴力というものは何でもない。誘惑こそ本当の暴力です。」(暴力と名のつくものに大したものはありません。誘惑というものこそ本当の暴力です。)

父、娘を刺す。

エミリア 「一つのバラの花が、嵐がそれをしぼませる前に折れたのです。」S. 304 (嵐の来ないうちに花を摘んだのです。)

殿、その他、来る。

オド 「……私は、貴方を裁判官として待ちます。そして、あの世に行っては、私は貴方を、全てのものの裁判官の前で待ちます。」 S. 304。 野村訳 1923年あり。

作] Minna von Barnhelm

Fabeln, 1759

『人類の教育』 Die Erziehung des Menschengeschlechts, 1780 で、彼の宗教上の信仰を要約した。

『ラオコーン』

『ハンブルグ演劇論』 翻訳あり、筑摩書房。

『ヴォルフエンビュッテル断片』 Wolfenbüttler Fragmente

研] Tschernyschewskij

Franz Mehring, Die Lessing-Legende. 1893. Die Neue Zeit に載った諸論文をまとめたもの。

新版は、2. Aufl., Stuttgart 1906. in: Franz Mehring Gesammelte Schriften. Bd. 9. Berlin

1963: 英語の抄訳は、The Lessing Legend. N.Y. 1938. Critics group による vol. 11

日本語訳、風媒社 1968年 第1部。部分訳、土方・麻生訳 1932年。

Mehring は、40才でマルクス主義へ、それまでブルジョア新聞の記者だった。

メーリング 「ドイツ古典文学の歴史と批判」

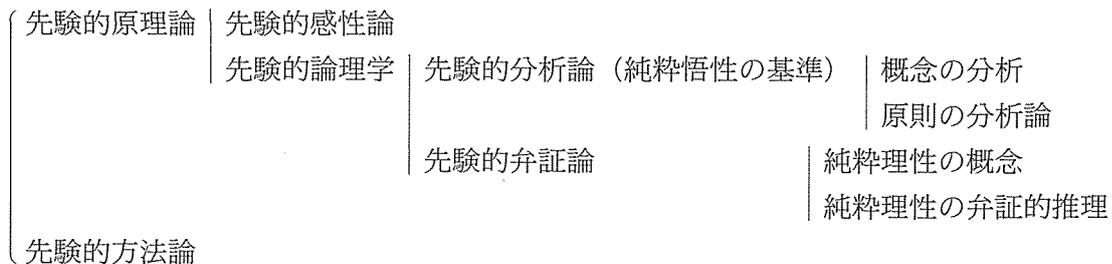
Paul Reimann, Legendenbildung und Geschichtefälschung in der deutschen Literaturgeschichte in: Unter dem Banner des Marxismus. 訳、ライマン 『ドイツ古典文学批判』

Gotthold Ephraim Lessing. Sein Leben in Bildern. Veb Bibliographisches Institut, Leipzig 1956

- (1) 世界古典文庫の「賢人ナータン」484 ページ
- (2) Friedrich Schlegel
- (3) 献 林達夫「三つの指輪の話」(『文芸復興』)
- (4) シュヴェーグラール 『西洋哲学史』 100-101 ページ

カント Immanuel Kant, 1724 Apr. 22, Koenigsberg, Preussen - 1804 Feb.12

Kritik der reinen Vernunft. 1. Aufl. 1781, 2. Aufl. 1787 邦訳 1921 (2. Aufl.) 天野 1961 (2. Aufl.) 篠田



「カントは、先行者たちの一面的な哲学的努力を一つの結び目のように統一と総体へと総括し

た、哲学の偉大な革新者である。」(シュヴェーグラー『西洋哲学史』下、岩波文庫 102 ページ)
「かれはあらゆる哲学者にたいして、一部分は敵対的で一部分は親和的な、なんらかの関係に立っている。」(同)

「ドイツ哲学は、……ライプニッツ＝ヴォルフらの合理主義的形而上学から脱却し、真にドイツ的な、すぐれた体系を完成した。それは封建的諸制約のもとに徐々に勃興しつつあったドイツ・ブルジョアジーの意識の反映であると同時に、それまで小国に分割されていた民族を統一せんための理想を反映するものであった。他方においてドイツ古典哲学は隣国フランスの大革命の理論的な反映でもある。

カントは大陸の合理論とイギリスの経験論を統一し、フランスの啓蒙主義や当時の自然科学の集中的な体系化であるニュートン物理学の影響を受けながらかれの先験哲学を完成した。」(『哲学用語辞典』青木文庫 p. 172-3)

マルクスは、カントの哲学を「フランス革命のドイツ的理論」と言った。(「歴史法学派の哲学的宣言」)

「真理にたいする厳粛な愛、非常な誠実、および素朴な謙遜が、かれの性格の特徴であった。」(シュヴェーグラー)

「カントは徹頭徹尾非社会的人間であった。」「政治的国民的利害は彼にはまったく縁遠いものだった。」「カントは個人生活では、徹頭徹尾俗物であったが、科学の歴史を、ことに3つの偉大な業績によって豊かにした大学者であった。」「この書 [純粋理性批判] によって彼は、1つの解放的行動を全うしたのであった。彼はドイツの大学にはびこっていた独断的哲学を粉碎した。」(91 ページ)「神と自由と不死とは、認識されないにしても、考えることができる、という彼の要求から、カントの倫理学は出発した。」「カントの倫理の片足はまだキリスト教に立っている。」(93 ページ)「もちろんカント倫理の他の片足は、フランス革命に立っている。」(94 ページ)「カントは近代美学の樹立によって、偉大なる功績をたてた。」(95 ページ) F. メーリング『マルクス主義の源流』徳間書店

作]『永久平和のために』『純粋理性批判』

参考文献 H. Cohen, Kants Theorie der Erfahrung, 1871

E. Cassirer, Kants Leben und Lehre

M. Wundt, Kant als Metaphysiker

Manfred Buhr, Immanuel Kant, Leipzig 1974

Heinrich Heine, Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland (『ドイツ古典哲学の本質』岩波文庫)

ゲーテ 1749-1832

Frankfurt am Main に、名士の子として、天分を持って生まれた。Goethe は歴史的知識が広い。Frankfurt の家＝父の家に、多くの本があった。父の感化が大きかった。例に、Goethe、Herzen、Pushkin がいる。今でも残るゲーテ生誕の家は、市の中心のマルクトのそばにある。第2次大戦で壊れるが、復元された。Goethe の父は、教養人、勉強家、金持ち、名家である。Goethe は、16 才で Leipzig 大学に入学し、学び、父は、息子の学士卒業論文を、生涯 desk の上においた。

シュトラスブルグの近郊の村で、フリーデリケとの愛を交わす、しかし捨てた。ゲーテの罪悪感は大い。これが、例えば、『野ばら』、『ファウスト』になる。

イタリア旅行に出、1786-88年で、詩人を自覚する。フランス革命に感激し、影響される。Weimar王国（ザクセン・ワイマール公国）に招かれる。人口は10万で、彼は26才だった。大臣、首相になる。この生活は、けっして全部プラスにはならなかった。「もしゲーテがワイマールの椅子から立ち上がったら、ワイマールの天井はつきぬけただろう。」

ワイマールでシラーと交友する。ゲーテの家が、ワイマールに今もある。となりは、ゲーテ博物館になっている。年代的にゲーテの資料を展示している。博物学、つまり鉱石・植物採集、自然科学の研究、機械考案などである。彼は全人格的發展を望んだ。ゲーテ夏の家もある。

作] 『ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン』 不正・虚偽と闘う騎士

『若きウエルテルの悩み』 情熱の書

教養小説 『ウイルヘルム・マイスター』

ディドロの『ラモーの甥』を翻訳し、それを仏訳し、原文と同じになったところがある。

『詩と真実』 自伝

Urfaust レクラム文庫、岩波文庫（私はウィーンで見た。テアター・アン・デア・ウィーン）
『ファウスト博士の物語』 民話 16世紀に民衆本、人形芝居（東ドイツで見た）になった。

ゲーテ Urfaust が1887年に発見された

ファウスト伝説

Georg Faust (Knittlingen um 1480 生まれ—Staufen 1536-39 死)。ゲオルク・ファウストは、1480年ころ、ヴェルテンベルクのクニットリングェンで生まれる。性、豪放。好んで大風呂敷をひろげて、人を煙にまいた。当時、かなりの学者だった。1507年に、クロイツナームで教職についた。その後、ハイデルベルク大学、1513年にエルフルト大学で教え、ここでホメロスの講義をした。宗教問題で、エルフルトを追われ、バンベルク、ヴィッテンベルク、インゴールシュタットへ行く。1528年、追放された。だが名声を取り戻し、1540年ころブライスガウのシュタフェンで亡くなった。

生存中にヨハン・ファウストとして伝説化が始まった。魔術に結び付いた冒険談で、1570年ころ、ラテン語で書かれ、ドイツ語訳も出た。1587年 『ヨハン・ファウスト博士行状記』 69章、ヨハン・シュピース書店、フランクフルト・アム・マイン(1)が、民衆本として出、矢つぎばやに、版を重ねた。

(1) Johann Spiess, Historia von D. Johann Fausten. 1587

Marlowe 1564-1593, Doktor Faustus.

Faust

第1部 1808 第2部 1832 死の年。一生かけて書く。何度も何度も、死ぬまで。

第1部 悪魔メフィストフェレス 対 ファウスト博士の契約。アウエルバッハのケラー（ライ

プチヒ)

あらすじ：グレートヒェンとの恋、兄殺し、グレートヒェン獄中に、子も死なせる、自分も死ぬ

主 「人間は努力をする限り、迷うものだ。」(1)

ファウスト 「また要らんことに神学までも」(2)

〃 「本当に君の肺腑から出たものでない以上、心から人を動かすということはできないものさ。」(3)

〃 「真剣に言いたいと思うことさえあれば、なんで言葉の詮索などする必要があろう」

ファウスト 「人間というものは、自分にわからないことはこれを軽蔑し、また自分にとって煩わしいとなると、善や美にたいしてもぶつぶつ不平をいうものだ。」(4)

メフィストフェレス 「考えごとは一切やめて、まっしぐらに世間へのりだしましょう。申しておきますが、思索などやるやつは、悪霊に引きまわされて枯れ野原のなかを、ぐるぐる空回りしている家畜みたいなもんです、その外側には立派な緑の牧場があるというのに。」(5)

〃 「いいかね君、すべての理論は灰色で、緑なのは生の黄金の樹だけなのだ。」(6)

メフィスト 「お寺は丈夫な胃の腑をもっており、これまでも方々の土地や国をたべたけれど、ついぞたべ過ぎたということはないのです。」(7)

レーニン は、亡命生活の時、必ずファウストを鞆に入れていた。

ゲーテのグレートヒェン悲話は、1771年にフランクフルトで起こったスザンナ事件をもとにしている。子ごろし。“West Side Story” 映画・ミュージカル

- | | | | |
|-----------------|-------------|-------------|------------|
| (1) 岩波文庫 28 ページ | (2) 33 ページ | (3) 44 ページ | (4) 85 ページ |
| (5) 123 ページ | (6) 136 ページ | (7) 197 ページ | |

シラー Schiller, Fr. 1759-1805

ゲーテよりもっと反逆的な気持ちをもって生まれる。士官の子。プルターク、ルソーを読む。意志に反して、軍学校で医学を学ばせられる。その抑圧から自由詩人になる。

処女戯曲 Die Räuber

[あらすじ]兄カールは、理想主義者で、弟モールは計って、父との離間を策す。カールは、盗賊達の首領になり、力で不正を正す。

国の王様カール大公は怒る。執筆禁止となる。1782年、マンハイムで上演さる。監獄へ入れられそうになり、逃げる、そのためマンハイムへ秘密の旅行をした。

第2版に、「暴君らに抗して」 1783、が入った。シラーの詩は、ロシア語になった。

1784 Kabale und Liebe (たくらみと恋) が上演された。若者たちの恋と権力者たちの陰謀の物語である。

1785年 Watson の Geschichte der Regierung Philipps II を読み、オランダ独立史を書こうとする。1786年 Huber と、各国各時代の反乱史を出そうと話し合ったことが動機であった。3

年かけて第1部(1788年)を脱稿した。ヴィーラントがこれを絶賛した。

Fr. Schiller, Geschichte des Abfalls der vereinigten Niederlande von der spanischen Regierung. Leipzig 1788 (フリードリヒ・シラー『オランダ独立史』岩波文庫 上下 1949)

1787 ワイマールへ行く。『ドン・カルロス』を出版した。フィリプ2世治下のスペインを舞台にした。ワイマールに、シラーの家がある。

1788 『オランダ興亡史』により、イエナ大学教授になる。就任演説は「世界史とは何か？」であり、大学の講堂は立すいの余地なく、学生を感激させる。“Brotgelehrte、こういう学者のように金や銀を求めない。”と。イエナ大学(=Fr. Schiller 大学)は、これ以降、真理を求める人々を出す。例、E. Heackel (進化論者)。シラーは45才で死す。

バラード(物語詩)をつくる。例えば、「人質」は太宰の「走れメロス」になった。

作]『オルレアンの少女』1801

『ウイルヘルム・テル』1804 反ナポレオン民族解放戦争のさ中に生まれる。